

密教による『麗氣記』の相承——麗氣灌頂の成立と変遷——

赤塚 祐道

はじめに

両部神道では、金剛・胎藏の両部曼荼羅を、日本の神祇に配当して説明する。『麗氣記』にはその特徴を見出すことができ、真言密教ではこうした神仏習合思想を密教の伝統的儀礼の一つである灌頂をもって継承してきた。神祇灌頂または神道灌頂と呼ばれるものである。

今回はこの神祇灌頂を取り上げ、『麗氣記』との関係について若干述べてみたい。

一、『麗氣記』に見られる印と真言

さて、『麗氣記』はその内容から密教僧の関与が想像されるが、密教の特徴ともいえる事相に関して見ると、『麗氣記』本文には高度な事相理論が組み込まれているわけではないために、純粹な密教僧による製作とは考えにくい。しかし、この『麗氣記』には密教の最深秘たる灌頂の授与の場面が示され、密教との関わりは否めず、少なからず密教と関わった者が関与し作られたことに違いない。

この『麗氣記』を両部神道書と位置付ける理由には、密教経典や空海撰述の引用や印・真言を用いている点があげ

られる。また、『麗氣記』本文中には密教の灌頂儀礼の際に用いられる偈文が取り入れられている。

すなわち、第七卷「心柱麗氣記」では、

諸仏金剛灌頂儀 汝已如法金剛竟

為成如来体性故 汝応授此金剛杵⁽¹⁾

とあり、『略出念誦經』の、

諸仏金剛灌頂儀 如已如法灌頂竟

為成如来体性故 汝応受此金剛杵⁽²⁾

の文を傍線部を改変し用いていることは明らかであり、『麗氣記』の成立には灌頂との関わりがあることが考えられる。同様に第八卷「神梵語麗氣記」においても、

諸仏正覚金剛杵 往古菩薩智法身⁽³⁾

樹下成道常説法 大日本国成鎮壇⁽³⁾

という類似する表現が認められる。このような灌頂の偈文の改変は、他の中世史料においても確認でき、偈文そのものが流布していたと考えられる。

『麗氣記』に関して見れば、このような偈文の利用については、すでに『麗氣記私抄』において、

下ノ偈ニ、汝応授此金剛杵ト云フ故ニ云々。真言宗ノ^(撰カ)灌頂ニ亦、此ノ文ヲ用キルト云々。

とあり、真言宗の灌頂にこの偈文を用いると指摘しており、『麗氣記私抄』の段階、すなわち応永八年（一四〇二）には

偈文そのものが使われ、なおかつ真言宗の灌頂で用いていると知られていた。

さて、灌頂との関わりは偈文だけではなく、灌頂の際に用いられる真言が『麗氣記』に登場する。すなわち第七卷「心柱麗氣記」では先の偈文に続き、①オシバザラゲトバ、②

オシアビラウシケン、③オシバザラゲトバ、④オシバザラゲトバの四種の真言が書かれる。①は金剛界大日如來の真言、②は胎藏大日

如來の真言、③は金剛界五仏の種子、④は胎藏五仏の種子である。これらはいずれも灌頂等で広く用いられる真言・種子であり、両部神道書において使用されることも多い。

また、第八卷「神梵語麗氣記」では、麗氣灌頂に用いられる印・真言が登場する。すなわち、豊受皇大神の印明を、

根本正覚印 八握印を結ぶ。爰には五鈷印。

オシバザラゲトバ、
オシバザラゲトバ

とし、八握印を結び金剛界大日の真言を誦すとあり、引き続き、天照皇大神の印明には、

八葉開華印を結ぶ。爰には八葉印。

オシバザラゲトバ、
オシバザラゲトバ

とし八葉印を結び胎藏五仏の真言を誦すことで、豊受を金剛界、天照を胎藏にあてている。このような、

豊受皇大神・・・八握印、オシバザラゲトバ（金剛）

天照皇大神・・・八葉印、オシバザラゲトバ（胎藏）

といった関係は、後世、麗氣灌頂において授与される印明に通じるものがあり、麗氣灌頂の背景に第八巻「神梵語麗氣記」があると考えてよい。

つまり、第七巻「心柱麗氣記」では、神話の中に密教の灌頂儀礼を巧みに取り入れながら神話の密教化を図ったといえる。続いて第八巻「神梵語麗氣記」では内外両宮を金胎両部にあて密教をもって神を拝もうとする意図が窺えるのである。

二、『神宮方并神仏一致抄』の麗氣灌頂作法

『麗氣記』成立当初は、本文中からもわかるように、いかにして密教儀礼と神祇を結びつけるかが課題であった。しかし、こうした灌頂との関わりは時代とともに形を変え、灌頂をもって『麗氣記』を相承するという考えまで登場する。すなわち麗氣灌頂である。

『麗氣記』に関連する灌頂については、『神宮方并神仏一致抄』に道場の莊嚴と作法について書かれている箇所があり、儀式化された『麗氣記』の継承を知ることができる。

『神宮方并神仏一致抄』では麗氣灌頂の道場莊嚴について、鉢や幣、闕伽器や鈴杵を備え、密教の修法を行い、その途中で阿闍梨が弟子を呼び印を結ぶとある。ここで、注

目すべきは、

資料① 麗氣灌頂道場図



次、麗氣記一卷、三種神祇ノ絵画ヲ屏風ニ懸テ見ル也。

とある点で、『麗氣記』そのものを置いて、伝授が行われていたことがわかる。ここで描かれる道場図には「麗氣一部」とあり、『麗氣記』を置き伝授が行われていたことを示している。『麗氣記』が灌頂をもって継承されたことを示しているが、このように『麗氣記』そのものを灌頂に用いるといったことは『神宮方并神仏一致抄』以外では確認できていない。

さて、その灌頂作法については、次のように書かれている。

資料② 『神宮方并神仏一致抄』より

灌頂初重。資、東ノ半疊ノ前ニテ礼拝三反。次、半疊左ノ膝ヲ立テ坐ス。師ハ西ノ半疊ニ右膝ヲ立テ坐。師ノ右、資ノ左ヲ合シ塔印無所不至列。次資、西ノ半疊ノ前ニテ礼拝三度。資ハ右ノ膝ヲ立テ坐シ、師ハ東ノ半疊ニ左ノ膝ヲ立テ坐。師ノ左手、資ノ左手ニテ塔印、明如前。次内五古印明、如前。以上初重。

第二重。資、東ノ三礼、左膝立。師、西、右膝立。師右、資左、外古^{外古}、^{外古}、^{外古}。塔印^{正ク合セ}、^{テ開時}。資西三礼、如前。師東坐。師左、資右。

外五古明如前。塔印明如前。以上第二一。第三重。資、東、半三礼。師、東。師右、資左。外縛明如前。内縛明如前。第三重。次、資西坐三礼、鳥居相承。岩戸開。吒枳尼相伝受也。印信等也。

以上のような作法が道場図とあわせて述べられているが、『麗氣記』の注釈書類の中で麗氣灌頂の形態を知ることができる唯一の史料であり、作法そのものも興味深い。初重、二重、三重の段階を踏み、阿闍梨と弟子が左右の座坪を替えながら、また左右の手を替えてお互いの手を合わせ一つの印を結ぶ様子がわかる。

このような、阿闍梨の半印と弟子の半印を合わせ一つの印を結ぶ所作に着目し、次に真言宗の法流との関係について考えてみたい。

三、師資更並座の大事

麗氣灌頂を考える場合、印明の結誦に一つの特徴があるといえる。すなわち、資料②に示される阿闍梨と弟子が並び、互いの手を合わせ一つの印を結ぶという点である。

こうした所作は、密教において様々な印信が伝わる中でも特異なものであり、醍醐三宝院流系の法流に伝わる「師資更並座大事」に通じるものがあると考ええる。師資更並座大事は座主灌頂とも呼ばれ、醍醐三宝院の定賢（二〇二四〜二〇〇〇）より勝覚（二〇五七〜二二二九）が相承したものを勝賢（一一三八〜一九六）が頌にした大事を指す。ちなみに、三宝院流慈猛意教方では、

師資更並座 対面不二方 迎撰成円塔 如妙法花印
三仏同法界 無相無分別 一大虚空輪 ^{外古}
知空尽消体 独存第一命 照了心明道 諸色皆発光^⑩
とう偈文が伝えられている。

しかし、三宝院流といっても憲深（一一九二〜一二六三）を祖とする三宝院流報恩院方ではなく、意教方をはじめ、地藏院方・中性院方・松橋方・慈猛意教方・西大寺流といった法流に相承されている大事である。

三宝院流松橋方の支流である西大寺流には次のようである。

資料③

並更座大事 覚洞院奉授御室作法也

先阿闍梨西坐東受者東坐向西師資相向先閉塔印明

外古

次更坐阿闍梨東受者西印同前明

麗氣灌頂

其後師資共並向南方師西資東師右手風空捻資左手風空

合師資手指合無所不至印成也

麗氣灌頂 誦後麗字誦授也

次更坐師東資西師左手資右手合印相如前

明麗氣灌頂 誦授後麗字不誦

只令觀也云

右師資血脈不共相承云

資料③をみると一見して阿闍梨と弟子が東西を入れ替え一つの印を結ぶ様子がわかる。すなわち資料③では『麗氣記』と関係ない大事にも関わらず資料②と所作に共通性を見出すことができ、三宝院流の「師資更並座大事」を模して『神宮方并神仏一致抄』に見られる麗氣灌頂が行われるようになったのではないかと推測できる。

また、三宝院流の大事を用いていることから、三宝院流を中心に麗氣記灌頂が流布したとも考えられるが、麗氣灌頂の広がりについては今後の課題としたい。

四、神道灌頂との関係

現在、麗氣灌頂は単独で行われることはなく、神道灌頂の一部として麗氣灌頂が相承されている。すなわち膨大な

神道灌頂印信の中に麗氣灌頂印信があわせて相承されている。

例えば御流神道の印信を集めた『御流神道横印信集』の中には麗氣灌頂に関する印信が収録され、神道灌頂という形式で一度に伝授された様子がわかる。そこには「師資和合印 法界大恵刀師ハ左手」「師資成羯磨 内縛五古印」「第二重印明師資更並座対面不二方也」という印が説かれ、いずれも資料②③の麗氣灌頂の作法に通じるものがあり、『御流神道』の麗氣灌頂印信も「師資更並座大事」の流れを汲んでいることがわかる。

また、『御流神道横印信集』には、

第三十七 麗氣灌頂印信重位初

豊受皇大神月輪 根本正覚印結八握印ヲ

外五古印也云々明二明也云々

第三十八 麗氣灌頂二重

天照太神日輪也 結八葉印名開敷印也

麗氣灌頂云々

とあり、豊受に八握印で金剛界大日呪、天照に八葉印で胎藏大日呪をあてるという点は、「神梵語麗氣記」における印と真言の関係に通じるものがあり、『麗氣記』継承においてこれらの印明が重視され、麗氣灌頂により代々継承されてきたことを示している。

おわりに

これまで、『麗氣記』と麗氣記灌頂について考えてみた。

第一に、『麗氣記』本文に関しては、『麗氣記』成立の背景には灌頂作法があり、『麗氣記』編纂にあたり作者が神話を密教化しようとする考えが背景にあること、そして、この両部神道書である『麗氣記』の流布にともない、『麗氣記』は灌頂をもって継承され、とくに第八卷「神梵語麗氣記」の印明に関しては代々伝えられる『麗氣記』の印明であったことを明らかにした。

第二に、麗氣灌頂については、おそらく、中世、悉曇灌頂のような様々な灌頂が盛行する中で行われるようになったと考えられるが、本論では、「師資更並座大事」との類似性を指摘し、この大事より麗氣灌頂の一つの作法ができたものとした。

以上のように、『麗氣記』と「灌頂」を考える上で、麗氣灌頂は欠かせないが、それだけでなく、仏教側でどのように『麗氣記』が流布し扱われてきたか、東密の三宝院流のみならず他流での位置、台密との関係などを考察することで、さらに『麗氣記』と「灌頂」の関係が明らかにされるものと思うが、それは今後の課題としたい。

注

- (1) 『大正大学総合佛教研究所紀要』第二十五号 六頁。
- (2) 『大正蔵』第十八卷二五一頁下。
- (3) 『大正大学総合佛教研究所紀要』第二十六号 六頁。
- (4) 神奈川県金沢文庫蔵『無名抄』(三三函七)では偈文冒頭の「諸仏」を「如来」や「不動」に替え、偈文最終句は『麗氣記』と同じく「汝已如法金剛竟」となっている。中段階ではこの灌頂の偈文が流布し広く用いられたと考えられる。
- (5) 天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵『神宮方并神仏一致抄』。
- (6) 『大正大学総合佛教研究所紀要』第二十六号 七頁。
- (7) 『大正大学総合佛教研究所紀要』第二十六号 八頁。
- (8) 天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵『神宮方并神仏一致抄』。
- (9) 天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵『神宮方并神仏一致抄』。
- (10) 『東密諸法流印信類聚』第四卷 本冊IV醍醐流 4 三〇七頁—三〇八頁。
- (11) 『東密諸法流印信類聚』第五卷 本冊V醍醐流 V 三二三頁—三三五頁。
- (12) 大正大学蔵『御流神道横印信集』(二四八・一八一・一)。

(13) 大正大学蔵『御流神道豎印信集』(一四八・一八九・
二一一)。

(大正大学綜合佛敎研究所研究員)